博 士 学 位 論 文

内容の要旨及び審査結果の要旨

令和５年度

京都外国語大学

はしがき

これは学位規程（平成 25 年文部科学省令第 5 号）第 8 条による公表を目的として、令和 6 年 3 月 15 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

氏　　名	侯　遠方
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第27号
学位授与の日付	令和6年3月15日
学位授与の条件	本学学位規程第3条3号該当
学位論文題目	日本語と中国語における漢字同形語（二字漢語動詞）の意味や用法の相違に関する研究 －学習者を対象とする日本語の二字漢語動詞及び有対自動詞・他動詞の習得に関する調査－
論文審査委員	主査　教授　彭 飛
	副査　教授　竹内 誠
	副査　教授　張 黎（大阪産業大学）

論文内容の要旨

本博士論文は日本語と中国語における漢字同形語の意味や用法の相違に関して、主として日本語の二字漢語動詞を対象に研究したものである。①「日本語学習者 1000 人を対象とする二字漢語動詞の習得状況の調査研究」、②「日本語における二字漢語と類義語の和語との相違点の考察」、③「日本語における二字漢語と類義語の漢語との相違点の考察」、④「日本語と中国語における漢字同形語(二字漢語動詞)の意味や用法の相違の考察」が研究の四本柱である。日本語における和語の類義語、漢語の類義語との相違点の考察において、それぞれ「使用対象の相違」や「動作主の相違」、「共起語の相違」、「文法的振る舞いの相違」、「語源さらにその歴史的変遷」などの視点から論じた。序章、終章を含め、全 7 章から構成される。

第 2 章～第 4 章では、日中漢字同形語及び類義の漢語・和語の使い分けに関して考察した。主として、漢語「強化」と和語「強める」及び中国語の“强化”、 漢語「深化」と和語「深まる」及び中国語の“深化”、日本語「包囲」と中国語の“包围”、日本語の「輩出」と中国語の“辈出”、日本語の「傑出」と中国語の“杰出”、 日本語の「反応」と中国語の“反应”、 日本語「批准」と類義の漢語「許可」及び中国語の“批准”“许可”、 漢語「整理」と類義の漢語「整頓」及び中国語の“整理”、“整顿”、 漢語「感動」と類義の漢語「感

激」及び中国語の“感动”“感激”　における微妙な相違に関して考察した。

第 1 章では、日本語の二字漢語（動詞）の意味や用法に関わる諸問題に関して、日本語学習者　1000　人を対象とするアンケート調査を実施し、(1) 日本語の二字漢語動詞と中国語の漢字同形語に意味的相違がある場合、日本語学習者は中国語の漢字同形語の用い方の影響を受け、中国語式の日本語を使ってしまうことが多く見られた。(2) 日本語の二字漢語動詞と中国語の漢字同形語が使用対象において相違がある場合、日本語学習者は中国語の漢字同形語の用い方の影響を受け、中国語式の日本語を使ってしまい、日本語独特の表現の習熟度が低かった。(3) 日本語の「傑出」、「緊迫」、「興奮」、「混乱」、「困惑」などの二字漢語動詞は「～した」の形で名詞を修飾するのに用いられるが、中国語では、通常、形容詞として「“～（的)”＋名詞」の形で用いられる。中国語の用い方の影響により、修飾語としての機能を果たす日本語の漢語動詞の用い方を習得できず、「～な」、「～的な」の形で誤用してしまう日本語学習者が多かった。(4) 日本語では「孤立」、「収縮」、「増加」、「減少」などの二字漢語動詞は自動詞として「～する」、または使役の「～させる」の形で用いられる。しかし、中国語の漢字同形語は「名詞＋“～”」、「“～”＋名詞」のように用いられる。中国語の用い方の影響を受け、それらの二字漢語動詞を間違えて「～をする」の形で使用する日本語学習者が多かった。(5) 日本語の二字漢語動詞は類義の和語と意味的に共通するところがあるが、使用対象、または使用場面において異なっていることが多い。しかし、日本語学習者の多くは類義語との使い分けを習得していなかった。(6) 日本語の二字漢語動詞を使用する場合、正しい格助詞を選択することは中国人日本語学習者の苦手なところである。日本語の「入学」、「合格」、「熱中」、「明記」、「登場」、「入場」、「搭乗」、「接近」、「精通」、「挑戦」、「留意」は通常、「～に○○スル」の形で使用される。だが、アンケート調査を通して、間違えて「～を○○スル」や「～が○○スル」を使用してしまう日本語学習者が多いという傾向が窺えた。日本語の「卒業」、「散歩」、「退職」、「通過」など移動を表す動詞は、通常「～を○○スル」の形で用いられ、移動の場所、離れる場所を表す。しかし、アンケート調査を通して、この用法を習得していない日本語学習者が多いという実態が浮き彫りになった。

口述試問

口述試問の際、主査・副査から様々な見地から質問されたが、論文提出者は資料に立脚し、長年の研究の蓄積を遺憾なく発揮し、ほぼ的確な回答を示し、かつ興味深い議論も展開される結果となった。「語源調査が不十分で初出例の特定に問題がある」「豊富なデータを元にもっと掘り下げて研究しそのルールをまとめてほしい」「二字漢語動詞の自他問題についてもっと研究してほしい」などの質問もあった。さらに「史的考証につめの甘さが見られる」「論文中の例文の訳文の再吟味が必要」などの意見もあったが、今後の課題の研究の進捗が期待される。

審査結果

本論文は中国人学習者の最も頭を悩ませる漢字同形語（二字漢語動詞）の研究で、研究の新規性、オリジナル性が認められ、結論にいたる議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的であると評価される。

①本論文で考察した日本語と中国語における漢字同形異義語は中国人学習者の最も間違えやすいものばかりである。漢字圏学習者向けの日本語教育において極めて重要である。個別課題の研究も、日本語と中国語の意味相違の対照研究に新たな視点を導入し、オリジナル性が強く、今後の日本語教育・中国語教育に貢献できるものである。

②本論文では『日中辞書』『中日辞書』の問題点を指摘しており、辞書編纂においても大きな意義をもつ。

③日本語学習者　1000　人を対象とする二字漢語動詞の習得状況の調査研究を通して、日本語と中国語における違いが見事にあぶり出されている点も評価する。

ただし、本論文に問題点がないわけではない。一部の考察にはやや脆弱な面も見られる。今後、史的考証などの研究が期待される。

本研究は、日本語と中国語の「漢字同形異義語」の対照研究の最前線でなされたものであり、研究テーマが絞り込まれており、研究の方法論が明確である。先行研究に関する調査も十分に行われ、その知見も踏まえている。情報収集と分析能力、オリジナル性が高く、考察も詳細で、理論構築もしっかりできており、高い評価に値するものであることに変わりはない。当該分野の学術研究の進展に貢献し、独創性を備えた研究である。本審査委員会は、全員一致で、申請者に対して博士（言語文化学）の学位に値するとの結論に達した。